

5. 除草剤の比較試験について

青森営林署 新城担当区主任 成田 敏

1. はじめに

造林事業におけるつる切作業の薬剤が、つる類及びかん木類並びに造林木に及ぼす影響を把握し、更に薬剤の効率的施用量を考察する為に、試験を行ったものである。

2. 調査地の概要

- (1) 場 所 青森市大字新城字新城山国有林100い₁林小班内
(2) 地 況 基岩=砂岩 深度=中 湿度=適
堅密度=軟 土壌型=適潤性黄色系褐色森林土 (YBD)
傾斜=中 方位=S
(3) 林 況 昭和49年秋と昭和50年春にスギ新植、昭和50年から下刈・つる切を実施してきたが、つる類の繁茂が著しい箇所である。

造林木のスギは17年生で、平均樹高が $\frac{5\text{ m}}{3\text{ m}\sim 7\text{ m}}$ である。

- (4) 代表的な植生
- | | | | |
|---|-----------|-------|---|
| ス | ギ (造林木) | タニウツギ | |
| カ | ラマツ (天然木) | ク | ズ |
| ヒ | バ (") | | |
| ナ | ラ (") | | |
| ホ | オノキ (") | | |
| イ | タヤ (") | | |

3. 試験方法

(1) 使用した薬剤

ザイトロン微粒剤 (ピリジン系トリクロピル粉粒剤) 1kg当たり731円
ア。物理的、科学的性質

(7) 水にわずかに溶ける。

(イ) 有機溶媒ヘキサンにはほとんど溶けないが、アセトンには溶けやすい。

(ウ) 光、熱に安定。

イ. 作用性

(7) 植物の茎葉などから吸収されて体内を移行し、細胞分裂を阻害して植物を枯死させるホルモン型・接触吸収移行性の一般広葉雑草に効く選択性除草剤。

(イ) 植物体内の移行性は大きく、土壌中の移動性は中程度である。

(2) 試験区の設定

10m×10m

=0.01haのプロット

3ヶ所に、A区=120

kg/ha、B区=80kg/ha、

C区=40kg/haとした。

(3) 散布日の天候

平成3年8月23日、

晴(朝露あり)

無風であり、前日は、

曇時々雨だった。

(4) 散布方法

等高線に沿って、20

m~30m間隔に散布道

を刈払いし、背負式動力

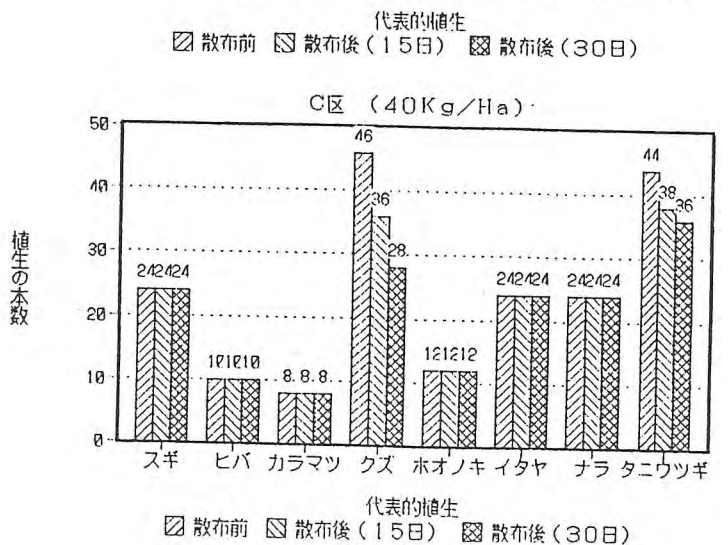
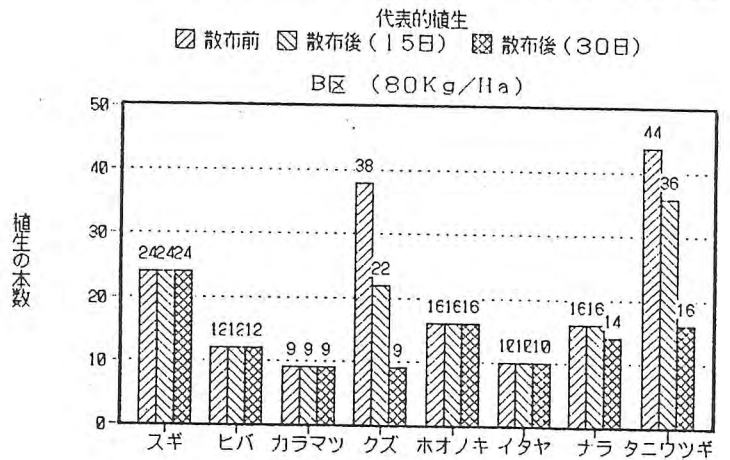
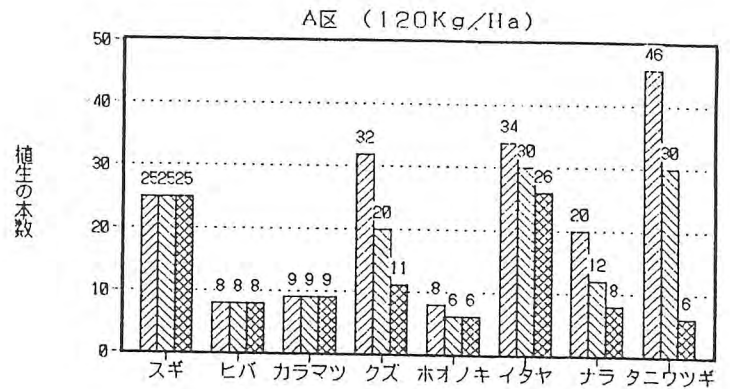
散布機で散布した。

(5) 試験経過

各区共、散布後15日

目、30日目に枯損調査

した。



結果は、表-1及びグラフのとおりであるが、クズに対しB区がA区より効果があったことは、樹高が高いために散布むらがあったのではないかと思われる。

表-1

各調査区の成立本数/枯損本数及び枯損率

区分	植生	スギ	ヒバ	カラマツ	ナラ	材木	イタヤ	クワガキ	クズ
		生/枯 %	生/枯 %	生/枯 %	生/枯 %	生/枯 %	生/枯 %	生/枯 %	生/枯 %
散A区	布120K	25/0	8/0	9/0	20/8	8/2	34/4	46/16	32/12
	後B区	24/0	12/0	9/0	16/2	16/0	10/0	44/8	38/16
15	80K	0	0	0	13	0	0	18	42
	日C区	24/0	10/0	8/0	24/0	12/0	24/0	44/6	46/10
目	40K	0	0	0	0	0	0	14	22
	散A区	25/0	8/0	9/0	20/0	8/2	34/8	46/40	32/21
布120K	後B区	24/0	12/0	9/0	16/2	16/0	10/0	44/28	38/29
	30	80K	0	0	13	0	0	64	76
目	日C区	24/0	10/0	8/0	24/0	12/0	24/0	44/8	46/10
	40K	0	0	0	0	0	0	18	22

4. 考察

C区では、かん木及びつる類が若干枯れる程度である。

B区では、かん木及びつる類が64%~76%と枯死したが、ナラにおいても13%の枯死が出た。

A区では、有用広葉樹が24%~60%と枯死が出た。又、カラマツは枯死がなかったが葉が変色した。

5. まとめ

今回の試験は、つる切において80kg/ha区が最も良いと思われる。又、散布量や散布方法（スポット処理等）により初期の除伐にも応用できるものと思われる。

いずれにしても植生量や散布方法等により相当の差が生ずるものと思われる。今後、これらを究明するため試験を続けて参りたいと思いますので、皆様の御指導をお願いします。

以上